

の頃、イナゴが大発生しました。じいさんはワラを燃やして煙でイナゴ退治をしている時に、飛び火して実った稻と小豆を全部、燃やしてしまいました。

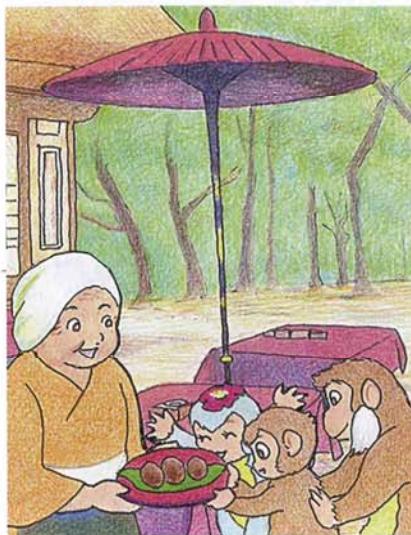
がつくりと肩を落として帰ってきたじいさんに、「ケガがなくて良かった。山の動物たちも無事かの」「ああ、みんな無事だ」「それは良かったの」「ばあさんが喜びました。
「すまん。来年の米や小豆を買う錢がないのじや」

福のおはぎ 茶屋

湯沢町 富樫あい子

詫びるじいさんに、「材料がなくなったら店じまいだ。休みは今までのどうびだあハハ」
ばあさんは明るく笑了。
じいさんは、焼け残りの米や小豆を手に取り、「焦げ臭い米だが来年まで食いつなげるかいの」眉を寄せています。
「はい、大丈夫ですよ」力強い、ばあさんの返事です。
いよいよ、茶屋を閉める日がきました。
「これで、おはぎ作りは最後だの」
二人は米をしごき、小豆をひと鍋煮て寝ました。
次の朝、目を覚ましたばあさんはピツクリです。
小豆がふた鍋と米が二日分、といでありました。
「これは上等な小豆だ」

「あれ、まあ。玄関に砂糖
が……」
「ああさんが腰を抜かし
ました。
「おい、メシを炊くぞ」
二人は早速おはぎを作
り茶屋を開けました。
おはぎは、全部売り切
れてしまいました。
「やれやれ、明日からは本
当に閉店じやのう」
二人は、ぐつすりと寝
てしましました。



今日は一晩中見張りま
しょう

と言いますが、やはり寝
てしまます。

今度こそ一人は、茶屋
の外で見張りました。

すると現れました。

黒い五つの影法師が
茶屋に入つて行きます。

「おじいさん！」

「わしが、後をつける」

と五つの影が帰っていく
後を追いかけました。

帰ってきたじいさんは
声も出ません。

「……ほれ、あのサルだ」

「むかし、じいさんが畑
に行くと、サルが畠には
ままで足の骨を折り歩
けないでいました。じいさ
んは、家にサルを連れて
帰り、足に添え木をして、
しばらく茶屋で面倒見た
のです。足が治ると山に
返してあげました。

「あのときのサルだの」

「そうだ。あのサルの仲間
たちじや」

ほつこりと、うなずいて
いました。

今、武州峠に、じいさん
ばあさんと、サルがお給
仕する茶屋があると、風
の便りに聞きました。

次々に台風がやつてきて
ました。なんだか今年の
夏は不安定!突然の豪雨
も多くて!やはり地球の
どこかで、何かが壊れ始
めているのかもしませ
ん!巡る四季の移ろいは
日本の風土、人々の心、
文化、全ての大切な礎!
当たり前のことだが、当た
り前にある事が、今は一
番、贅沢なことなのかも
しませんね!

暑い夏と負けない位に
熱く燃えていたのがリオ
のオリンピック!毎晩の
熱戦にすっかり寝不足で
した。地球の裏側から、
画面を通して、選手たち
は色々なことを教えてく
れました。

己と戦うことの凛々し
さ、一瞬に命を燃やす生
きる事の美しさ!肉体と
心の可能性の素晴らしさ
・人間で素敵だなあ!生

きる事、命を与えられることは、素晴らしいことなど…改めて思いました。そして、今年は何より感じたのが、お互いに信頼し合い、助け合い、競い合い、喜び合うことの素晴らしさだった気がします。

日本は体操、卓球、リレー、シンクロとチームで沢山のメダルを取つてくれました。柔道も、レスリングもチームと言つていくらい、共に支え合つた結果だと思ひます。勝利の喜びを分かち合い、喜び合う選手たちの姿は、人がどう生きていけば、「幸せ」を感じられるのか：体現してくれました。

折から、三千本安打を成し遂げたイチロー選手が会見で、「自分がやつ



An illustration of a butterfly, identified as Dai-miyōwase (セセリ), resting on a textured surface. The butterfly has dark wings with distinct white veins and patterns.

(撮影・文
松島 孝)

生きる事の美しさ

シャンソン歌手
友納あけみ

高尾山の昆虫

84